

とびよ鳴け

小川未明

青空文庫

自転車屋の店に、古自転車が、幾台も並べられてありました。タイヤは汚れて、車輪がさびていました。一つ、一つに値段がついていました。わりあいにかつたのは、もうこの先長くは、使用されないからでしょう。

原っぱで遊んでいた、辰一は、なにを思い出したか、駆け出して、自転車の前へきました。そして、並んでいる古い車の中の、一つにじつと目をとめていました。

「ああ、まだある。どうか、この月の末まで売れないでいてくれ。」と、心で、いったのであります。

彼は、やっと安心して、原っぱへ引き返してきました。友だ

ちと鬼おにごっこをしたり、ボールを投げたりして、しばらく遊あそんだのです。しかし、いつまでも遊あそんでいることはできなかつた。夕ゆ刊かんを配はい達たつしなければならぬからです。

その自じてん転しゃ車やには、染そめ物もの屋やの徳とくぞう蔵さんが乗のつていたのでした。

「あいているときは、使つかいな。」と、やさしい徳とくぞう蔵さんは、よく辰たつ一いちにいいました。辰たつ一いちは、借かりて、この原はらつぱを走はしりまわつたことがあります。また、遠とおくまで乗のつて遊あそびにいったこともありました。あるときは、学がっこう校から帰かえつて、ぼんやり往おうらい来来に立たつていると、うしろでふいにチリン、チリンという音おとがするので、驚おどろいて振ふり向むくと、徳とくぞう蔵さんが、自じてん転しゃ車に乗のつて止とまつてい

ました。

「うしろへ乗らないか。」

辰一は、喜んで、徳蔵さんの背中につかまって、荷掛けに腰をかけ、足をぶらんと下げました。

「足を気をつけな。」

さびしい田舎道の方まで、自転車を走らせて、二人は、散歩しました。徳蔵さんは、辰一にとって、実の兄さんのような気がしました。

去年の暮れ、徳蔵さんに、召集令が下りました。辰一は、空が曇って、風の吹く日に、旗を振りながら、氏神さまへ送っていったことを忘れることができせん。

「万歳！ 万歳！」と叫びながら、どうか、めでたく凱旋してきてください。そのときは、また

こうして迎えに出るからと、ひとりでいったのでした。

徳蔵さんが、戦死されたという知らせがとどいたのは、ほたるの出はじめる夏のころでした。そして、それがじつに悲壮なものであったことは、このほど帰還した兵士の口からくわしく伝えられたのであります。その兵隊さんは、同じ部隊で、徳蔵さんのことをよく知っていました。

出征の際は、〇〇駅から、徳蔵さんは、出発したのです。兵隊さんに乗せた汽車が通ると、国防婦人の制服を着た女たちは、線路のそばに並んで、旗を振りました。後れた女

の人は、旗を振りながら、田圃道を走つてきました。また、工場うじようの窓まどからは青い服あおふくの職工しよっこうさんや白いエプロンの女工じよっこうさんたちが、顔かおを出だして、ハンカチを振ふるもの、手てを挙あげるもの、遠とおくからこちらまでひびくように、

「万歳ばんざい！ 万歳ばんざい！」と、叫さけんでいました。汽車きしやの窓まどから、兵隊へいたいさんたちも、これに応こたえていました。中なかには山奥やまおくの村むらからきたものもありました。徳蔵とくぞうさんのそばにいた兵士へいしは、はじめ、海うみを見みて、

「大きな河かわだなあ。」と、いつて、驚おどろいたそうです。

「海うみだ、河かわではないよ。太平洋たいへいようなんだ。」

徳蔵とくぞうさんは、教おしえました。

「あつ、これが海で、太平洋か。」と、その兵士は、目をまるくして、青い波を見ていました。そのときが、口のききはじめで、徳蔵さんと、この兵士とは、その後たがいになんでも話すように親しくなりました。徳蔵さんは、細長い顔をしていました。が、その兵士は、角張った顔つきをしていました。そして、その兵士には、年老った母親があつて、家を出るとき、母親は、つえをつきながら、停車場まで見送つて、

「家のことは、心配しないでいいから、お国へよくご奉公するだぞ。」と、いったそうです。兵士は、母親のいったことを思い出して、ときどき、涙ぐんでいました。

海を渡る船の中で、兵士は、

「いっしょに戦つて、いっしょに死にたいものだ。」と、徳蔵
 さんに、いいました。もとより温かな、誠の情けを持った徳蔵
 さんですから、

「ほんとうに、そうしよう。」と、いつて、その兵隊さんの手
 を、堅く握つたのであります。

上陸すると、すぐに、彼の部隊は、前線に出動を命
 ぜられました。そこでは、激しい戦闘が開始された。大砲の
 音は山野を押し、銃弾は、一本残さず草を飛ばして雨のごと
 く降り注いだ。そして、最後は、火花を散らす、突撃戦であり
 ました。敵を散々のめにあわして潰走させたが、こちらにも
 おお多しの死傷者を出しました。戦闘の後で、徳蔵さんは、あ

の兵士は、無事だったかと見て歩きました。けれど、その姿が、見つかりませんでした。

「やられたか、それとも傷を負って倒れてはいないか？」と、戦場の跡を敵の屍を越えて、探して歩きました。すると、その兵隊さんが、やぶの中に倒れているのを見いだしたのです。けれど、そのときは、すでに息が絶えかけていました。

「おい、しつかりせい。おれだ！ いっしょに死ぬ約束をしたのに、先にいったな。よし、かならず敵を打ってやるぞ。おれも、花々しく戦って、じきに後からいくから待っている。」と、徳蔵さんは戦友の死体を抱き起こして、涙を落としたのです。その後のこと、我が軍は、河をはさんで敵と対峙したのです。

その結果、敵前上陸を決行しなければならなかった。なにしろ、敵はトーチカに閉じこもり、機関銃を乱射して、頑強に抵抗するのです。ついに、決死隊が募られました。我先にと申し出たので、たちまちの間に定員に達したのです。この人たちは、全軍のために犠牲となるのを名誉と思つて、喜び勇んですぐ仕度にとりかかりました。

このとき、蒼白い顔をして、一人の兵士が、部隊長の前へすすんで、自分もぜひこの中に加えてくださいといつたのです。それは、徳蔵さんでした。

「後から、おまえ一人を入れると、ほかのものの申し出も許さなくてはならぬ。」と部隊長は、言葉にそういいながら、いずれ

劣らぬ忠勇決死の、我が兵士の精神に感心しました。だが、徳蔵さんの熱心は、その一言で翻されるものではありません。戦死した友との誓いを告げたので、ついに部隊長も許したのでした。

決死隊が、敵に飛び入ると、敵はそれを目掛けて、弾丸を集め、中しました。河の中ほどまで達するころには、人数が目に見えて減っていました。陸まで、もう一息というところで、無念にも弾丸を受けて、徳蔵さんは、

「天皇陛下 万歳！」と叫ぶとともに、水を紅に染めて見えなくなつたのでした。

辰一は「殉国英霊の家」と、立て札のしてある家の前を

通るたびに、目に熱い涙をためて、丁寧に頭を下げました。

「どうしても、あの自転車をかうのだ。あと、一週間ばかり、売れなければいいが。」

ある日、自転車の前へ行ってみると、その自転車が見えなかった。辰一は、びつくりして、おじさんにきいてみると、昨日売れたというのです。

「なに、あれくらいくるまの車なら、また出ますよ。」と、なにも知らない自転車屋のおじさんは、力を落としてちからおいる辰一を見て、そういったのであります。

その後のことです。辰一は、お友だちと、キャッチボールをやっている、ふと戦死した徳蔵さんのことを思い出すと、急に目

頭がしらが熱あつくなりしました。

「僕ぼくを自転車じてんしゃにのせて、この原はらっぱを走はしつてくれたことがあつたなあ。」と、いろんなことが、心こころに浮うかんでくるのです。

「あの自転車じてんしゃはだれが買かつたろうか。たしか、七円えんと札ふだがついていたが、惜おしいことをした。お父とうさんが自分じぶんの働はたらいた金かねで買かつてもいいといつたのに。」

彼かれの投なげる球たまがだんだん熱ねつを持もつてくるのでした。

「辰たつちゃん、すげえ球たまを出だすなあ。」

見みている友ともだちまでが、目めをみはつて、いいました。その球たまを受け取る勇ゆう吉きちも、顔かおを赤あかくして、額ひたいに汗あせばんでいました。強い球たまで、なかなか骨ほねがおれるからです。

「君、いい球を出すね。しつかり勉強すると、ピッチャーになれるぜ。」

さつきから、そばで見っていた、角帽を被った学生らしい青年が、いいました。

辰一は、ほめられたので、ちよつとはずかしかつたのです。

「僕ら、毎日曜の午後から××の空き地で、けいこをしているから、君もぜひやってきたまえ。そのうちにこの方面のものだけで、チームを作ろうと思つていなのだ。」と、青年は、辰一にいつたのであります。

辰一は、そういわれると、なにか急に明るく、力づけられたよ
うな気持ちになりました。

(ほんとうかしらん、おれは、ピッチャーになれるだろうか。)
「ありがとう。」といつて、辰一は、青年に頭を下げました。
そうだ、おれは、徳蔵さんのことを考えればいつだって気持ち
がしやんとして、どんな球でも出してみせるぞと、心に叫ん
だのです。

十二月の日曜日でした。風のない静かなお天気であります。
辰一は、午後から、××の空き地へいつてみようと思いました。

「あの学生さんは、きょうも野球をやっているかな。」

自分の住む町から、だいぶそこまで離れていました。空き地へ
いくと、今度広い道路が通るので、多数の家屋が取りはらわれた
跡でありました。

あたりを見ると、まだ半分壊されたままになつて、土台のあらわれている家もあつたし、すでに、一方の端では、新しく建築にかかった家もあります。見わたすかぎりの広場の中は、いろいろの風景が雑然として見られました。

こちらには、土管や、人造石が積まれているし、またあちらには、起重機が置いてありました。ところどころ木立があつて、頭の上を青い空が拡がっていました。都会でこんなにはるかな地へいせん

平線の見えるのは、珍しいことです。

遠い煙突からは、黒い煙が、上がっていました。ちようど、海をいく汽船の煙のようにも思われました。あちらでも、こちらでも、町の子供たちが、たこを上げて遊んでいます。風がないせ

いか、高く上がっているところがありません。そして、工夫たちも、今日（きょう）は仕事（しごと）が休み（やす）なのか、地平機（じならしき）が投げ出（な）されたままになって
います。

「だれも、野球（やきゅう）をやっていないが、どうしたんだろう。」と、辰一（たつ）は、がっかりしたが、年末（ねんまつ）であるので、なにか都合（つごう）があつてこられなかつたのだらうと思（おも）いました。

ここからは駅（えき）が近く（ちか）、絶えず電車（でんしゃ）や、汽車（きしゃ）の笛（ふえ）の音（おと）がして
ました。そして、停車場（ていしやば）のあたりは、にぎやかな町（まち）でありま
した。辰一（たつ）は、暮（く）れの街（まち）の景色（けしき）を見物（けんぶつ）して帰（かえ）ろうと思（おも）いました。

ガードをくぐると、そこだけは、一日（いちにち）じゆう日蔭（ひかげ）で、寒（かん）気がき
びしく、肌（はだ）を刺（さ）しました。暗（やみ）を照（て）らす電燈（でんとう）の光（ひかり）は、うす濁（にご）つて

ぼうつとかすんでいます。出口でぐちの煉瓦れんがの壁かべに、出かせぎ人にんぶほしゆ夫募集うのビラが貼はられていました。生活せいかつのために、未知みちの土地とちへいく人のことひとを考かんがえると、なんとなく、胸むねをしめつけられるような気がきがしました。

「健康けんこうであれば、どこへいっても生活せいかつができる。」と、学がっこ校こうの先生せんせいのおっしゃった言葉ことばが浮うかんできました。

さすがに戦時せんじであつて、町まちは、いつもの暮くれとちがひ、べつに飾かざりもなくさびしかつたのです。それでも歳さい末まつの気分きぶんだけは、どこにかただよつていました。アスファルトの道みちを人々ひとびとが忙いそがしそうに往おう来らいしています。くつの音おととげた音おとが、入いりまじつて耳みみにひびきました。

露店ろてんが、連つらなっていました。その一つには、ヒヨットコ、きつ
 ね、おかめ、などの人にんぎよう形がむしろがむしろの上うえへ並ならべてありました。
 それを商あきなうおばあさんは、日ひがほこほこと背せなか中に当あたつて
 いて、いい気持きもちで居眠いねむりをしていました。また、この寒さむいのに、
 どこから持もつてきたものか、ふな、なまず、雑魚ざごなどの生いきたの
 を売うっている男おとこがありました。これらの川かわ魚わざかなは、底そこの浅あさいた
 らいの中に、半はん分ぶん白しろい腹はらを見みせて、呼こき吸ゆうをしていました。そ
 となりとなりの隣あまでは、甘あまぐりを大おおなべで炒いっていました。四よつ辻つじのところへ
 出でると、雑沓ざつとうの中なかで、千にん人ばり針たのを頼たのんでいる女おんながありました。
 とおおんなとおおんなひとびとひとびと通とる女のおんな人々ひとびとが、そのそばに足あしを止とめていました。

「もう、お正しょう月がつがくるのに、出しゅつ征せいする兵隊へいたいさんがある

んだな。」

辰一は、感慨深く思いました。戦地へいく人のことを考える

と、じつとしていられないような気がしました。

このとき、突然軍歌の声、停車場の方にあたつてきかれ

たのでした。彼は、はじめられたように、群衆から抜け出て、

急ぎ足で、その声のする方へと向かったのです。国防婦人の制

服を着た人たちが、小さな日の丸の旗を振って、調子を合わ

せて歌っていました。戦闘帽を被った青年が、元気いっぱい

に大きな声で、音頭を取っていました。

紅いたすきをかけた、出征兵は、正しく、つつましく、立

つて、みんなの厚意に感謝していました。それは、徳蔵さん

が、送おくられたときの姿すがたを思おもひ出ださせます。まおなたく同じおなであります。徳とくぞう蔵ぞうさんはこうして送おくられていつたが、それかえぎり帰かえつてこなかつたのです。

そう考かんがえると、熱あつい涙なみだが、目めの中なかからわいてきました。いつのまひとにか、この人ひとと徳とくぞう蔵ぞうさんとが、同おなじ人ひとになつてしまつて、限かぎりない悲ひ壮そうな感かんじが抱いだかれたのであります。

辰たつ一いつは、のども破やぶれよとばかりに、大おお声こえをあげあて、万ばん歳ざいを三みたとびと唱となえたのでした。

彼かれは、帰かえりに、もう一度ど空あき地ちへ立たち寄よつてみさつきました。先さ刻つたこあをあげあげてあいた子こ供どもたちは、どすこへみいつたか、姿すがたが見みえなかつたのです。寒さむい風かぜが、荒こうり涼ようとひろばした広ひろ場ばを吹ふいていたつたました。辰たつ一いつ

は、支那の戦場の景色を空想しました。また戦死した徳蔵さんを思い出しました。

足もとの瓦の破片を拾い上げると、力いっぱい大空に向かつて投げました。

高い、高い空に、とびが、町を見下ろしながら舞っていました。自分が少年飛行家であつたら、飛行機に乗つて、ああやつて敵軍を爆撃するのだ。

「とび、とび！　大きな声で鳴いてくれ！」
 辰一は、胸の底からこみ上げてくる感激を、どうすることもできなくて叫びました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「赤土へ来る子供たち」文昭社

1940（昭和15）年8月

初出：「小学六年生」

1940（昭和15）年1月

※表題は底本では、「とびよ鳴 《な》 け」となっています。

※初出時の表題は「鳶よ鳴け」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

とびよ鳴け

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>